



仙台市 × イタリア、友好の歴史とスポーツを通じた交流 ～東京 2020 大会を契機として共生社会の実現に向けた取り組みを加速～

仙台市文化観光局文化スポーツ部スポーツ振興課

東京 2020 大会に向けたホストタウン事業

仙台市は、東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会（東京 2020 大会）に向けて、歴史的な友好関係のあるイタリア共和国のホストタウン^(注1)として、さまざまな交流事業を実施しています。

東京 2020 大会では、ソフトボール、車いすフェンシング等、複数のイタリア代表チームの事前合宿受入れが決定しており、大会に参加される選手・スタッフの準備・調整をサポートすることになっています。

残念ながら、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、東京 2020 大会は来年に延期となってしまいましたが、おもてなしの準備期間が延びたと前向きにとらえ、市職員だけでなく、市民のみなさんもイタリア代表の来訪を心待ちにしているところです。



野球 U15 仙台代表チームがイタリア中部地震の被災地を訪問し、現地子どもたちに向けて仙台の被災・復興について発表した

さらに、複数競技のイタリア代表の強化合宿を市内で実施し、東京 2020 大会の事前合宿に向けた市内の環境整備のほか、代表選手と市民との交流を通じた国際意識の向上やイタリア応援機運の醸成に取り組んでいます。



イタリア・ミラノでのバレーボール交流の様子

これまでの多種多様な交流

2016 年にイタリアのホストタウンとして登録されて以降、東京 2020 大会事前合宿に関する誘致交渉を本格的に開始し、同時期からイタリアのサッカー、バレーボール、野球・ソフトボール等の各競技団体と協力して、仙台、イタリアの両地で青少年交流を行っています。この交流では、スポーツを通じた交流はもちろん、日伊の文化を学んだり、互いの被災地を訪問し防災や復興について考える時間を設けたりするなど、さまざまな側面から相互理解を深める学びの機会となるよう心がけています。



女子バレー U16 イタリア代表チームを仙台駅で出迎える市民の皆さん

伊達政宗がつないだ友好の絆

ところで、仙台市とイタリアの友好関係には江戸時代にまでさかのぼる歴史があることをご存じでしょうか。1613 年、仙台藩の初代藩主、伊達政宗は、ヨーロッパとの通商ルートの開拓を狙い、家臣の支倉常長らを使節団として交渉のため派遣しました。使節団は、約 1 年の航海を経て辿りついたイタリア・ローマで、時のローマ

教皇、パウロ5世への謁見を果たし、さらには市議会から公民権を与えられたと伝えられています。この時に授与されたローマ市公民権証書は今日まで現存しており、仙台市博物館に収蔵されています。

東日本大震災の際に寄せられた支援

2011年、東日本大震災では仙台市も甚大な被害を受け、国内外からたくさんの支援をいただきました。イタリアからもさまざまな心温まる支援が寄せられ、2014年には、イタリア国立クレモナ弦楽器製作学校の卒業生から、被災した子どもたちを文化・芸術面で支援するため、11挺の弦楽器が寄贈されました。この楽器を使って地元の子どもたちによる演奏が定期的に披露されており、市民の心を温め続けています。

いただいた支援に対する感謝の気持ちから、本市は「復興ありがとうホストタウン^(注2)」としても活動しています。



イタリア人テノール歌手、マルコ・ヴォレリ氏による復興支援チャリティコンサート。ラストで常盤木学園高校音楽科の生徒と復興支援ソング「花は咲く」の合唱を披露

共生社会実現に向けて

東京2020大会では複数のパラリンピック競技の事前合宿受入れを予定していますが、合宿受入れに加えて、共生社会実現に向けたさまざまな事業を共同で行っていくということについて、イタリアパラリンピック委員会(CIP)とパートナーシップ協定を締結しています。

仙台市は昭和40年代から、全国に先駆けて車いす利用者用のトイレの整備や歩道の段差解消に取り組むなど、バリアフリーの街づくりのパイオニアとして共生社会の実現に取り組んできた歴史があり、この本市の姿勢にCIPが共鳴し、協定の締結という運びになりました。

東京2020大会を契機に、市民とパラスポーツ選手との交流等、さまざまな事業をCIPと協働して行って

いくことを目指しており、このような取り組みから、「共生社会ホストタウン^(注3)」としても認定されています。



シッティングバレーイタリア代表選手と地元小学生の交流

東京2020大会後も続くレガシーを

2002年、FIFAワールドカップでサッカーイタリア代表が仙台合宿を行った際に活動したスポーツボランティアたちが「SV2004」という組織を形成し、今でも仙台のさまざまなスポーツの舞台で活躍しており、街に残るレガシーとして受け継がれています。ホストタウンとしてのレガシーは、施設等のハード面での環境整備だけではなく、こういった市民活動が活性化すること、さらに市民の多様性を尊重する意識が向上し、共生社会実現に向けた取り組みが加速することだと捉えています。

昨年、「Amo ITALIA! (イタリア大好き!)」と銘打ったイタリアを応援・歓迎するための市民プロジェクトチームが発足。約60人の市民の皆さんを中心として、おもてなし企画や応援企画等をプランニングしており、今年は仙台ならではの七夕飾りをイタリアンカラーの緑・白・赤で作ったり、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が甚大だったイタリアに向けて応援メッセージを届けたりするなどの活動が行われています。

このような市民の皆さんの活動が、東京2020大会のレガシーとして将来にわたって受け継がれ、仙台とイタリアの友好の絆が末永く続いていくことを願っています。

(注1) 政府が進める「ホストタウン」構想に基づき、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を契機として、大会参加国・地域との人的・経済的・文化的な相互交流を図り地域活性化を目指す地方公共団体

(注2) 相手国との交流を通して震災時の支援に対する感謝や復興プロセスの発信を行うホストタウン

(注3) パラリンピアンとの交流やユニバーサルデザインの街づくりを通して共生社会の実現に向けた取り組みを行うホストタウン